

肥後五家荘の民家  
(第1報 平面の古形式)

熊本大学助教授 千々岩 助太郎

1. 地域・地勢
2. 沿革
3. 集落
4. 平面形式
5. 構造

## 1. 地域・地勢

肥後五家荘は熊本県八代郡久連子、仁田<sup>くれこ</sup>を<sup>いた</sup>しいばる<sup>はぎ</sup>、葉木<sup>もみき</sup>、樫木の5箇村の総称であつたが、昭和29年10月1日町村合併によつて隣接する下岳、柿迫、栗木の3箇村と合併して泉村が発足したので現在では泉村の一部となつている。昭和35年10月1日の調査によれば泉村全体および田五家荘地区の面積、戸数、人口および人口密度は第1表の通りである。

第1表

	面積	戸数	人口	人口密度
泉村	267Km <sup>2</sup>	1,341	7,281	27 Km <sup>2</sup>
五家荘地区	164	319	1,626	10

五家荘は九州中央脊梁山脉の中枢にあつて東は国見岳(1,692m)によつて宮崎県と境し、鳥帽子岳と銚子岳(1,489m)の鞍部(1,481m)を越えて椎葉村に通じ、北は大山(1,473m)、雁俣山(1,315m)の尾根によつて下益城郡白糸村、砥用<sup>ともち</sup>町に境し、二本松越(1,018m)によつて砥用町に通じている。西は保口岳(1,281m)を最高所として南北に延びる尾根によつて同村の柿迫地区に境し、笹越(1,006

m)によつて岩奥、河谷場方面に通じ、南は中央脊梁山脉より西に延びる支尾根によつて球摩郡水上、五木両村に境し、水上越(1,458m)および石楠越<sup>しやくなん</sup>(1,391m)によつて五木村へ、また五木川の流域によつて五木村に通じている。五家荘地区はかくのごとく四周を1,000m以上の山系によつて囲繞されているばかりでなく、地区内部にも大金峰山(1,396m)、小金峰山(1,377m)、茶臼山(1,446m)、上福根山(1,645m)その他1,000m以上の高山が10座以上聳立し全地区が高山地帯であつて、その山間の数多の奔流は溪谷を深くえぐつて地区の西南部において合流し、五木川、川辺川の上流をなし、下流において球磨川に本流に合している。

## 2. 沿革

五家荘は古くから平家部落と伝承されて来たが現地では平家のみでなく菅原道真の子孫と伝えられる家もある。しかし何れの場合も確固たる史実も考証もないのが現状である。ここでは杉本尙雄氏の論考<sup>(1)</sup>の一部を記して参考にしたい。

五家荘には夫々地頭または庄屋と称する

豪族がいて、広大な土地を所有し、一族あるいは所従と信ずる他の住民を所謂小作人として永年にわたって階級的支配を続けてきたものである。この地頭には平家の末孫と自称する人々と菅原道真の子孫と云い伝える家がある。前者は久連子、椎原および葉木に居住して緒方姓を名のり、後者は仁田尾および縦木に居住した左座姓を名のっている。久連子の緒方義高氏、椎原の緒方大典氏、葉木の緒方弘氏ならびに仁田尾の左座佐太郎氏はその後裔であるが縦木の左座家は絶えている。この緒方家および左座家が何時頃いかなる経路によつて移動してきたかは不明である。

由来書の記述によれば平家滅亡の壇の浦から五家荘に定着するまでの経路は壇の浦、熊野、今治、祖谷の菅生名、八幡浜、豊前柳ヶ浦、豊後鶴崎、由布院、大野緒方郷、日向鞍岡、白鳥山麓と追跡することができるという。鞍岡では山賊にあい、その頭目数馬なる者の異常なる好意と献身的奉仕によつて、久連子に平清経以下3戸11人、椎原に上総忠光以下2戸5人、縦木に越中次郎兵衛盛綱以下2戸5人および数馬等2戸5人計4戸10人がそれぞれ切り開いて定着し、祖谷からもたらした粟粒2斗7升を以て耕作し開拓したという。

仁田尾下屋敷の左座本家は明治30年頃仁田尾本村（今は古屋敷という）から移住されたものであるが、菅原道真以来の血統を

誇っている。その系図<sup>(3)</sup>によると菅原道真の長男左座太郎主従は氷川（八代郡北部を西流する）を溯つて岩奥路をたどつて西より仁田尾に入り、次男菅次郎主従は宇佐、砥用、菅村を経て北より葉木に入山したという。しかしこの地域には今のところ菅原氏にゆかりある伝説は何一つなくむしろ平家谷をいたるところ見出すということである。

両氏のうち何れが五家荘の何れの地に住みついたかも甚だ不明瞭である。即ち由来書によれば久連子、椎原、縦木は平氏であり、五家伝記によれば五家荘全部が平氏の末裔で緒方2家、左座氏3家と称し、肥後国語<sup>(4)</sup>によれば久連子、椎原は平氏、仁田尾、縦木、葉木は菅原氏である。また筆者が現地で調査したところでは前記の如く久連子、椎原、葉木は平氏、仁田尾、縦木は菅原氏である。結局久連子、椎原は平氏（緒方姓）、仁田尾は菅原氏（左座姓）が地頭として変化混同がないのに対し、縦木、葉木に出入がある。これらのことは生産力も低く、人口も至つて稀薄な五家の山中では両氏が占拠する区域も事実上は明確ではなく、唯々柿迫口にあたる左座本家、那須口の久連子緒方家、五木口の椎原緒方家の3家が外部山村、山麓村あるいは農村との交渉の要点に位して古くから有力となり、且つそれぞれ菅原家あるいは平家の子孫と自称するところから、五家荘全部が菅原氏

あるいは平家の隠棲地と云われることになつた理由が存するのであつて、葉木や縦木はさほど重要な立場ではなかつたのである。

3. 集 落

五家荘は永い間平地との交通極めて不便な桃源郷として自給自足の生活が続けられていたが近年山地開発のため道路が開通するに及んでその様相は一変し、林業その他山仕事のために人口も急激に増加している。しかしながら在来の人々の生業は農耕が主であつてしかも全域を通じて水田は極めて少なく、多くは原始的な焼畑式農業（木場こばさく作）である。従つて製茶、椎茸栽培なども重要な生活の糧である。

五家荘の戸数および人口は第2表の通りであるが、各地区とも数多の小部落に分れていて集落状態は完全な散居制である。部落のうち20戸以上集居しているものは椎原および縦木の本村部落だけであつて10戸未満のものが多い。葉木の例をとれば第3表の通りである。

第2表 五家荘地区戸口数  
(昭和35年10月1日調)

地区名	面積	戸数	人口	昭和24年人口
久連子	20Km <sup>2</sup>	62	278	188
椎原	14	54	276	149
仁田尾	33	87	447	411
葉木	33	35	160	190
縦木	64	81	463	449
計	164	319	1,626	1,387

第3表 葉木地区各部落戸口数表  
(昭和36年11月1日調)

部落名	戸数	人口	
平	16	74	旧仁田尾地区 " 山林関係者
腰越	4	20	
折付	5	21	
下屋敷	4	22	
東平	1	3	
福根	3	12	
山師	3	13	
計	36	165	

4. 平面形式

住家と明治年代以降に建築されたものが多く殊に最近急速に改築が進行しているので古い形式のものは極めて少ない。筆者が現地において調査したものおよび現地中学校に調査を依頼して得た資料のうち比較的旧態を存する住家48戸について検討した結果住家の平面は大別して3形式に分類できた(第2図)。その内訳は第4表の通りである。

第4表

地区名	A	A'	B	B'	C	計
縦木	2	0	2	1	0	5
椎原	2	1	5	0	1	9
仁田尾	10	1	2	1	1	15
葉木	4	2	3	0	1	10
久連子	5	1	0	2	1	9
計	22	5	13	4	4	48

近年改築されたものには便所、浴室などを住家内に設けた例もいくらかあるが在来もののはすべて別棟に建てられている。

A形式平面のものは小作人の住家であってもつとも多く存在する室を横列式に配置したものである。C形式平面のものは地頭の住家であつて6室以上を有する豪華なものである。B形式平面のものは両者の中間に位するもので5室ぐらいである。B形式のものは比較的多く現存するがその大部分は近年改築されたものが多い。古い住家でB形式のものは地頭の代行その他役職を有つ家柄であつて仁田尾の枚川まつ氏の住家(第7図)はこの例である。

#### A形式平面の住家

「にわ」または「かまや」住家の左端または右端の前面にあるのが普通で稀には背面にある例もある。土間のままであるが、茶をほうじるとき用いられる大きな釜が据えられ、その傍に炊事用の「つきかまど」が設けられている。家族の出入口が設けられ「にわのいりぐち」と呼んでいる。近年住家の妻側に炊事場を増築して「にわ」は製茶季節のほかは物置などに使用されている例が多い。

「へや」または「なかえ」「にわ」の奥にあるのが普通で床は畳しきが多く中央に大きな炉(いろり)が切られている。

「おもて」住家の中央にあつて床は板張りのものが多いが、一節に畳をしいたも

の、あるいは必要に応じて畳をしきようになつたものもあつて、ここにも炉が切られている。外来者用の「げんかん」が設けられているが、特別な構造もなく、はきものを脱ぐために大きな角材や平たい自然石などが置かれたままのものもある。背面壁に押入があつて「おしこみ」と呼んでいる。

「ざしき」「にわ」および「へや」の反対側にあつて、背面壁にそうて「とこ」および「仏だん」が設けられている。「おもて」および「ざしき」廻りには縁を周らしているが古い形式は第3図のように前面だけに縁があつてかつ外縁であつたものと考察する。

実例 久連子 上田実次氏住家(第3図)

“ 吉村喜代松氏住家(第4図)

“ 松崎末次氏住家(第5図)

“ 清水慶熊氏住家(第6図)

#### B形式平面の住家

A形式平面住家の「おもて」および「ざしき」をそれぞれ2分して「なんど」(または「とこのうら」)および「こざしき」を設けたもので、「なんど」は寝室として使用され押入を設けたものもある。「こざしき」には「仏だん」および「とこ」が設けられている。またこの形式ではおもての前面に立派な「げんかん」を設けた例が多い。A形式平面住家と同じように「おもて」および「ざしき」廻りに縁を周らしているが古い形式は第7図のように前面だけに縁

があつてかつ外縁で、妻側には切張り縁ぐ  
らいが設けられたものと考察する。

実例 仁田尾 枝川まつ氏住家(第7図)

久連子 柳川甚九郎氏住家(第8図)

葉木 松田 充氏住家(第9図)

#### C形式平面の住家

B形式平面住家の「なんど」をさらに2  
分して「ぶつま」と「いんきよま」が設け  
られ、「ぶつま」には仏壇を安置し、  
「いんきよま」は寝室として使用されてい  
る。「ぶつま」を独立して設けることは地  
頭の家に限られたということである。<sup>(6)</sup> ま  
た「ざしき」と「こざしき」とが「しもざ  
しき」と「かみざしき」に変つている。し  
もざしきの前面には破風造りの堂々たる  
「げんかん」が設けられ、「うえざしき」  
にはとこ、たな、書院などが設けられてい  
る。

実例 仁田尾 左座佐太郎氏の住家(第10図)

#### 5. 構造

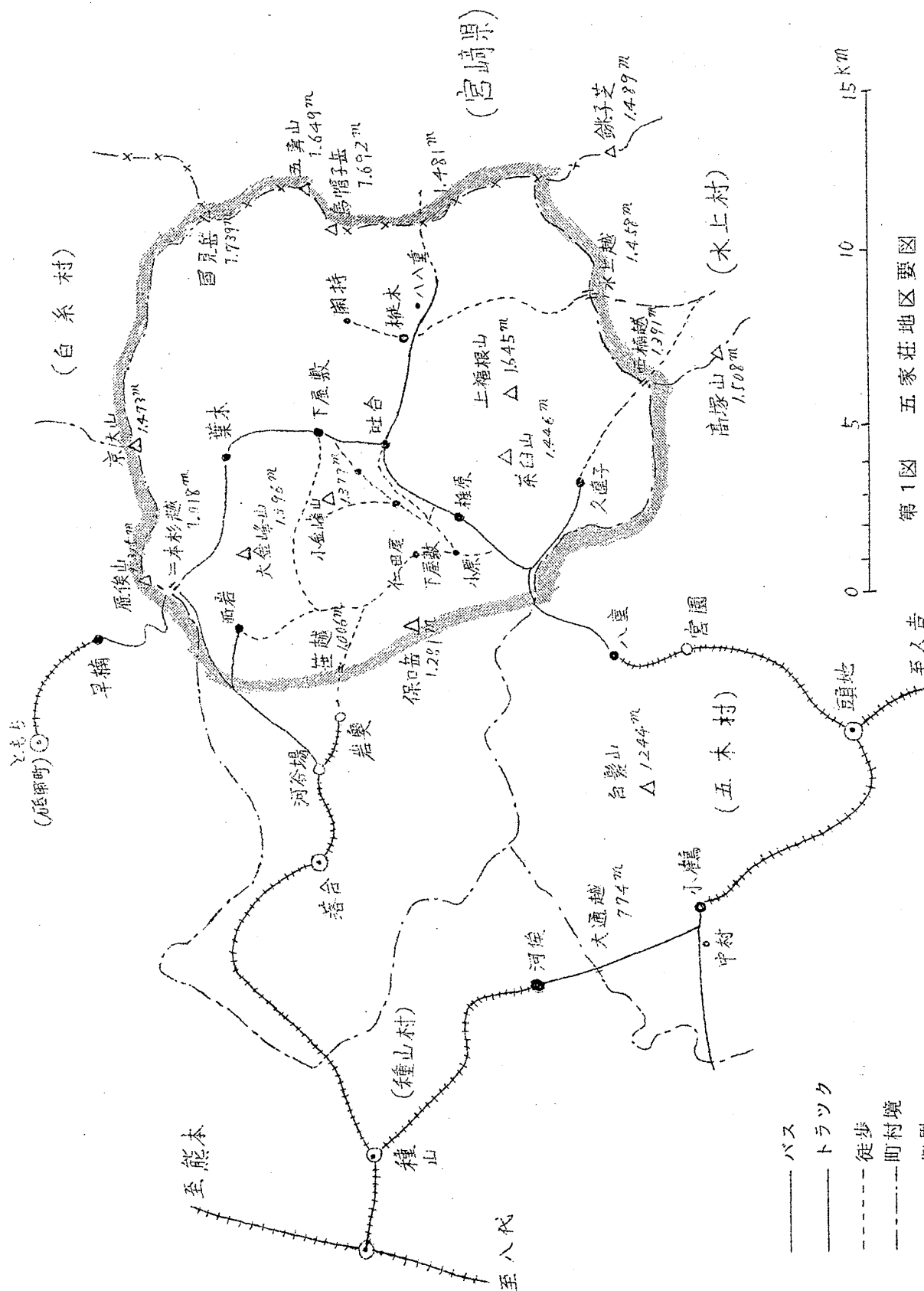
住家の多くは丘陵あるいは山腹の傾斜地  
を切り開いて建てられているので、敷地の

形状、大きさなどは一定しないが住家の方  
位は南向のものが多く平入で、住居は左、  
右何れのものもある。構造部材はすべて太  
く、柱の大きさは15cm角(5寸角)以上  
のものが多く用いられ大黒柱は30cm角  
(1尺角)以上のものがあり、柱の間隔は  
11間(6.5尺)を原則とし、間仕切壁は  
なく、建具を取除けば大広間となる。背面  
のみは比較的小きな柱を半間まに建てて全  
部壁で塞がれた例が多い。また「おもて」  
に限つて桁行方向を三分してその中間に2  
本の柱を建てた例がしばしば見られる。基  
礎には大きな自然石を用い根太、大引、束、  
足堅めなどすべて大きな材を用いて頑丈に  
構造されている。内法はすべて1.73cm  
(5.7尺)である。

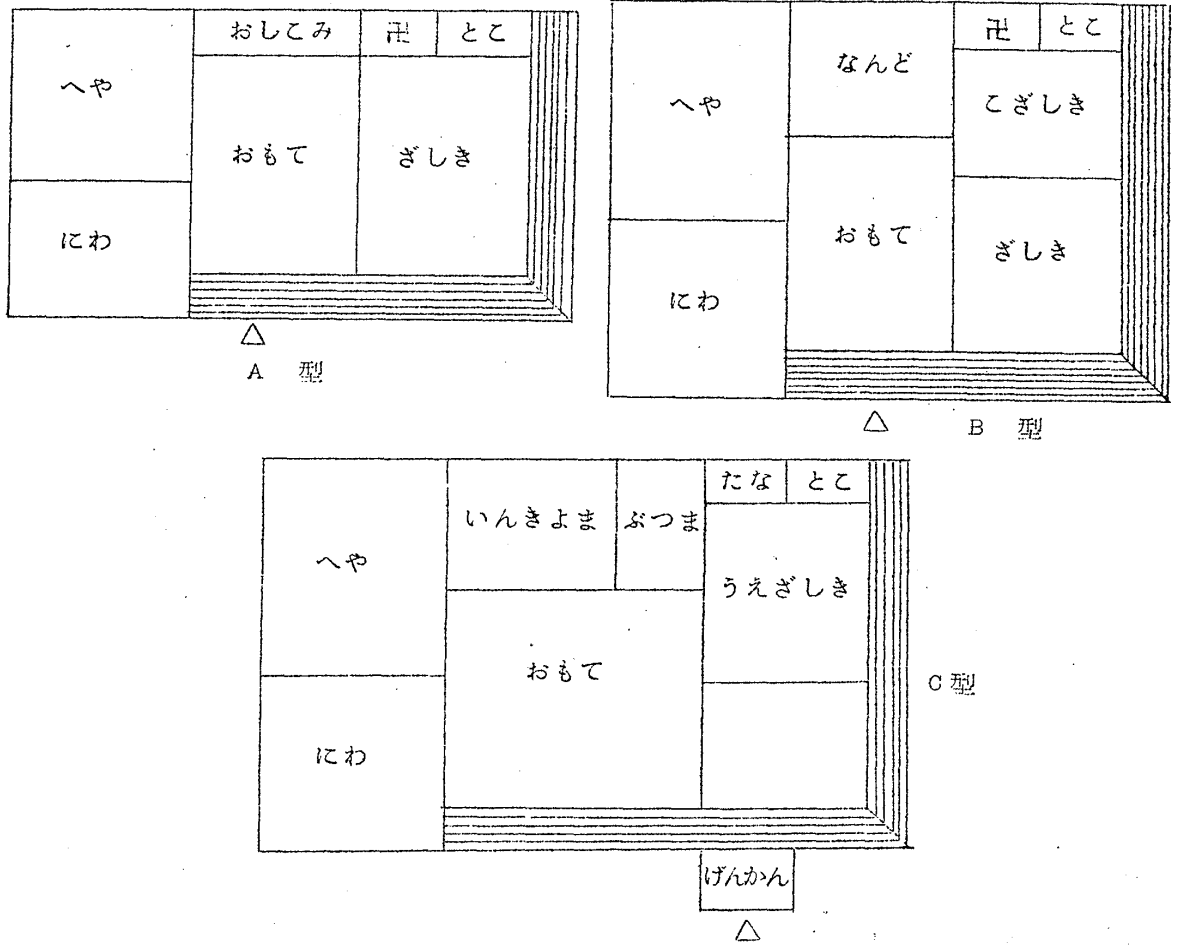
構造的には周囲半間は下屋のものが多く、  
梁は梁間方向に頑丈なものが架せられ、屋  
根は寄棟造りでサス構造のものが多く。屋  
根葺材料は在来のは茅であつたが近年  
瓦、鉄板、ルーHING、柿板等に葺き替え  
られたものが多い。(1962.1.10)

#### [ 参 考 文 献 ]

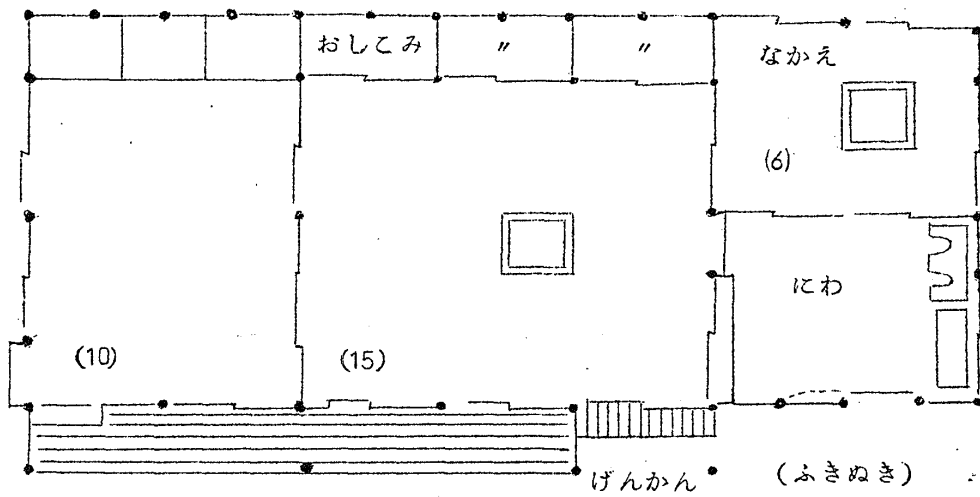
- (1) 杉本尙雄氏「肥後五箇荘の開発について」西日本史学第9号(昭和27.1.31)
- (2) 久連子本村平盛春長氏蔵
- (3) 仁田尾下屋敷 左座佐太郎氏蔵
- (4) 肥後国史所収
- (5) 細川藩史料の一部
- (6) 仁田尾 左座佐太郎氏夫人の談話



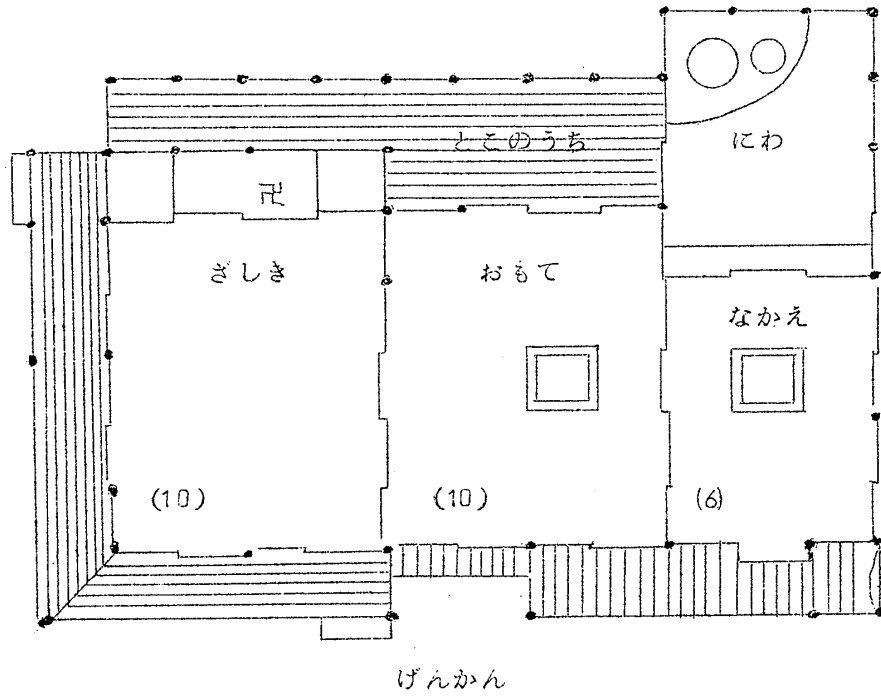
第1図 五家荘地区要図



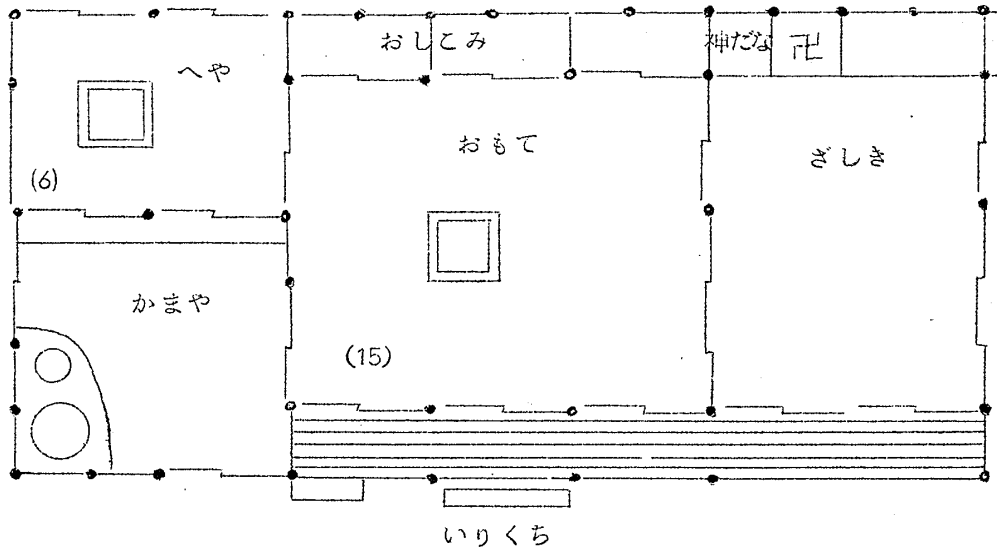
第2図 住家平面形式



第3図 久連子、上田実次氏の住家

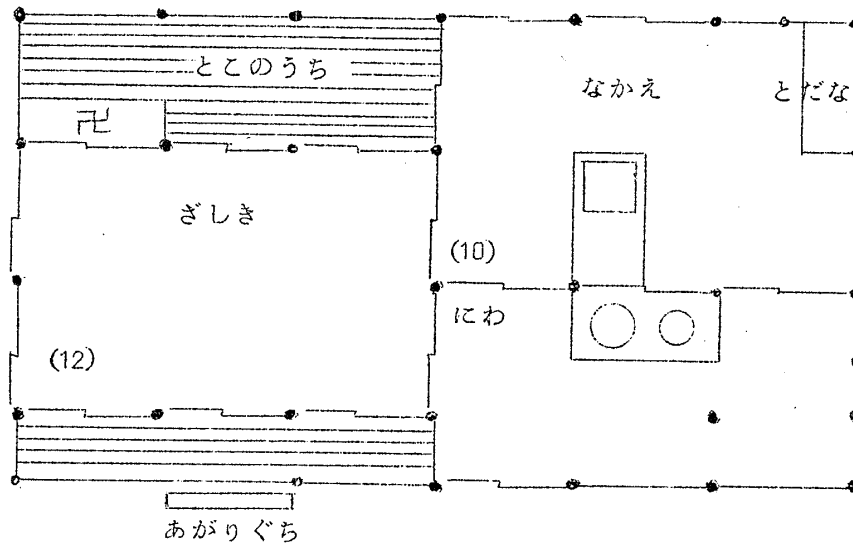


第 4 図 久連子 吉村喜代松氏住家

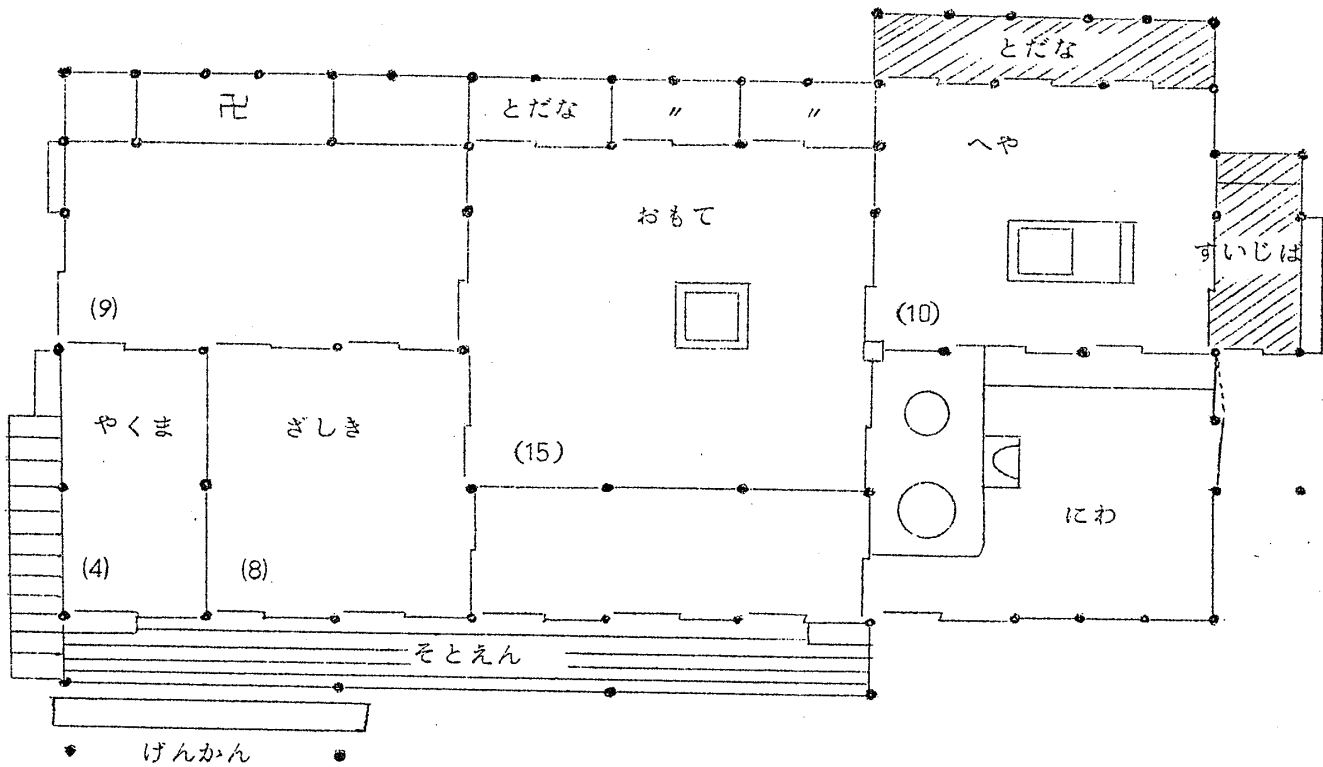


第 5 図 久連子 松崎未次氏住家

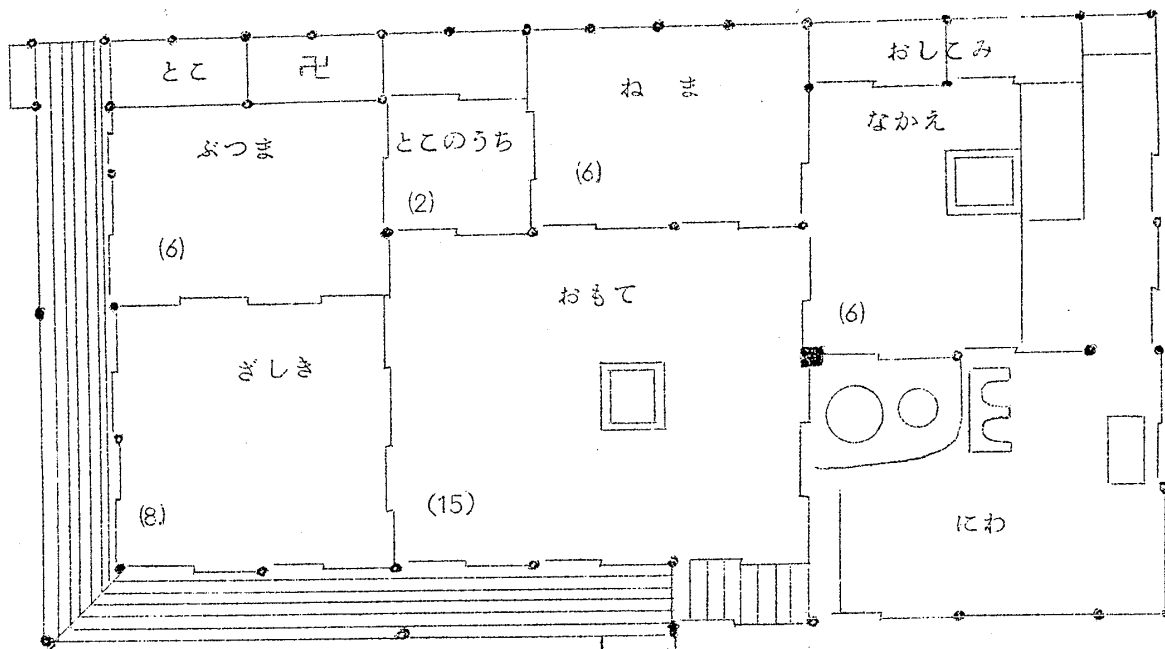




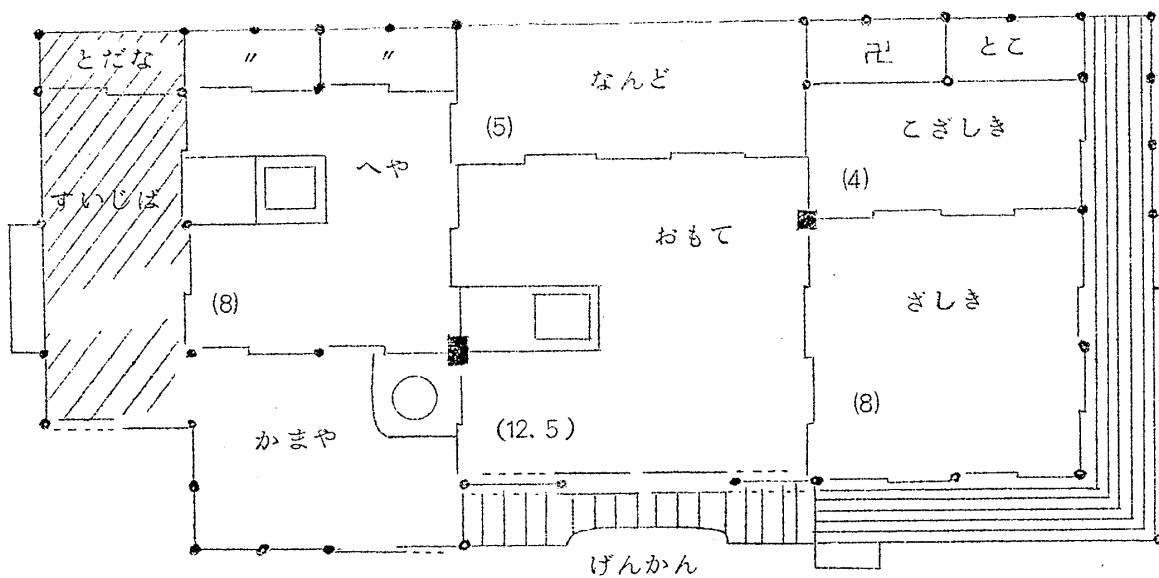
第 6 図 久連子 清水慶熊氏住家



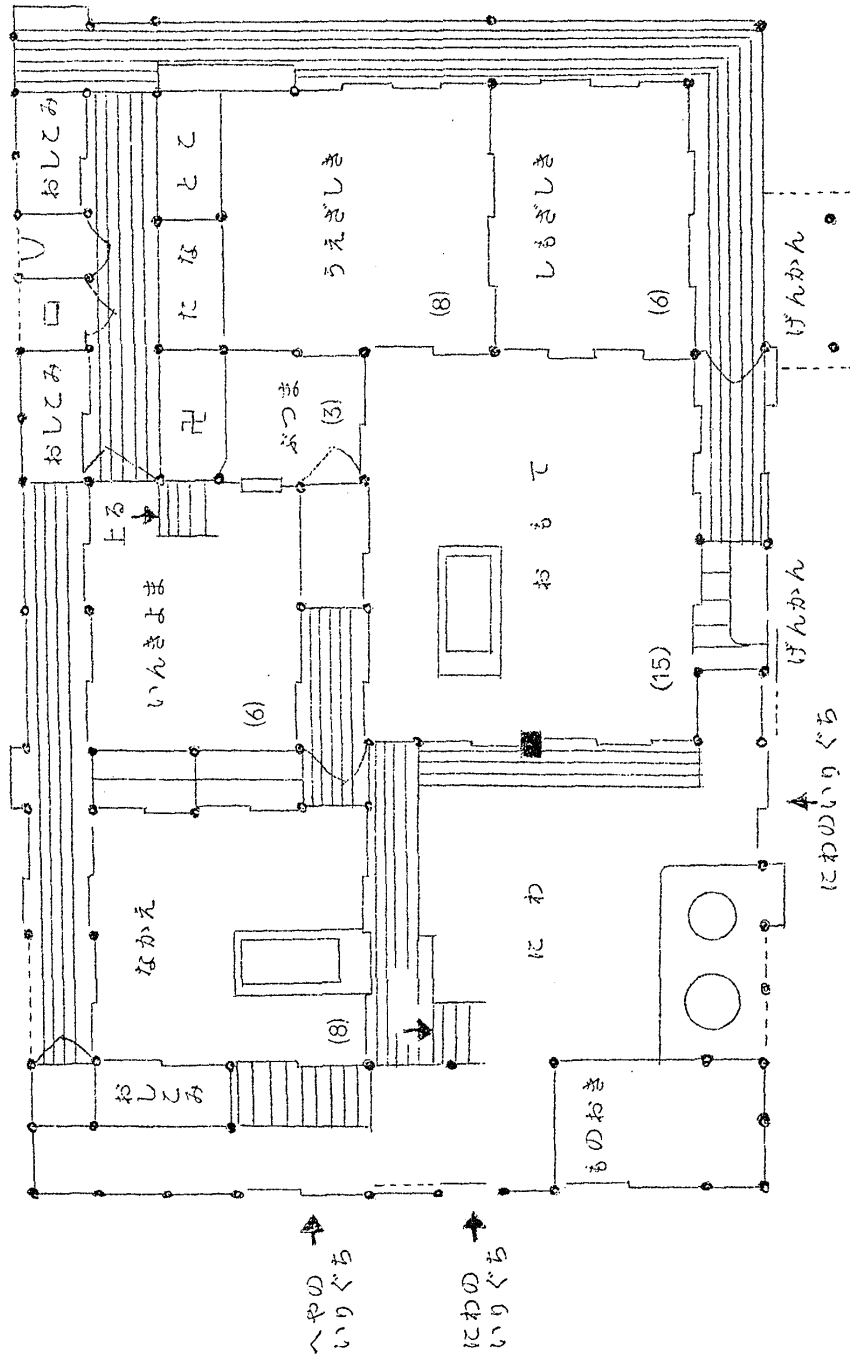
第 7 図 仁田尾 枝川まつ氏住家



第 8 図 久連子 柳川甚九郎氏住家



第 9 図 葉木 松田充氏住家



第10図 仁田尾 左座佐太郎氏住家